

浄土

1988-2

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日（別名 特別授承認雜誌）第三五号
昭和六十三年一月二十五日印刷 昭和六十三年二月一日発行
第五十四卷 二月号



弥野, 小林





二月の秀句

大いなる春を待つなる貧士かな

高浜 虚子

節分の何げなき雪ふりにけり

久保田万太郎

スキ―散り遠き日影の歩み寄る

望月 たかし

二月号



かの国には、常に種々の奇妙なる
雑色の鳥あり。白鷺孔雀、鸚鵡、
舍利、迦陵頻伽、共命の鳥なり。

——『阿弥陀經』

目次

法話

涅槃会に寄せて……………安孫子 虔 悦……(2)

＝仏教童話＝

ねはんえ

——お釈迦さまからの衛星放送——……………布 村 哲 哉……(8)

ずいそう

頑健と長命とは別物……………近 藤 良 貞……(15)

東西宗教の交差点〔1〕

功 徳 の 水……………福 嶋 瑞 江……(20)

《四行詩》

梅 の 花……………清 川 宗 治……(27)

(木)(下)(隆)(一)(随)(筆)(集) <11>

海と山の狭間で……………木 下 隆 一 ……(28)

——唱歌と童謡(1)——

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第44回……………寺 内 大 吉……(35)

親 縁 の 駅

挿絵 松澤 達文

表紙絵 小林治郎画

涅槃会に寄せて



安孫子 虔悦
あびこ けん えつ

二月十五日は、涅槃会（ねはんえ）です。

お釈迦さまが「なくなられた」日です。二千五百年前、インドの国での出来ごとです。随分大昔の、遠い国での話（花まつりにしても）ですが、現代の私達にとってどういう係わりがあるのでしょうか。

山形の東根という小さな村に生れた私には、涅槃会が近くなるとなぜか腹を空かした小

学校時分を思いだします。

この日は、お檀家の方が、重箱一杯の「おだんご」を涅槃図の前にお供えします。お米の粉でまるめた比較的大きなお団子で、渋紙で作った籠がいっぱいになっていくのを楽しみに見ていたものでした。長いお茶話が待ちきれず、冷たくかじかんた手を子供にとって高い机の上へ伸ばしては、祖母からびしゃつとやられるわけです。

旧暦の二月、根雪で覆われた本堂（おみどう）の寒さはまた格別で、何故かお明りの炎も細々となるほどでした。

この供物へのお返しに、今度は寺から同じように、白い小さめのお団子を十粒ほど、半紙にくるんで上げます。お米によつては、黒いのもあり、真白いのもあり様々でしたが、それを、鼻水でかたかたしたじゅばんを着て、丸くなった近所の学童達が「ねはんだんごけろ」と言つては、よく貰いにきたものです。味もつかない、わずかな数のお団子はあつというまになくなり、しきりに鼻をすすっていました。彼等は涅槃図の前に座り、お釈迦さまのこと、動物達のこと、不思議そうにながめあい霜焼けの手を合せていたものでした。お檀家のお年寄りの中には、図の説明に詳しい方もいて、尾鰭がついた話をよく聞かされたのは、昭和二十年代の終わりの頃です。

食べ物話になりましたが、つまり、涅槃会は、そのころはしっかりと仏教行事として親しまれ、知らず知らずのうちに仏教の話に耳にし、仏事の縁に触れていたわけです。勿論今でも、各地で様々な形で涅槃会は、行われていることですが、さて、東京近辺は

いかなものでしょう。十二支に代表される動物のこと、お釈迦さまの死に間に合わなかった小動物の話などは、遠い昔の物語になってしまった感があうます。

深川の寺にある涅槃図は、痛みがひどく、しかも大幅なものですから、下陣に掛ける作業が大仕事です。一人で脚立に登り、竹竿に挟み恐る恐る掛けることになります。

それでも、前後一週間程、毎年この時期になると大涅槃図が下がり、ご法事でお参りの方々に拝んでいただき、お話しをさせてもらいます。

涅槃像そのものをご本尊とする宗派もあり、釈尊の涅槃に憧れ、きさらぎのもちづきの頃に自分は亡くなりたいと願った西行や、多くの仏教者に親しまれたように、仏教徒にとって大事な行事であります。

さて、覚者となられた釈迦牟尼世尊は、涅槃に入られて、釈迦牟尼仏となり、仏となられたことは言うまでもありませんが、人間釈迦の死が現実そこに存在していることをしっかりと見すえなければならぬと思います。決して釈迦はよみがえることなく、永遠の眠りについたのであって、この死こそ我々と只一つ共通する所と言えましょう。

つまり、仏教は、悟りを開くためのものではなく、悟りは死を越えることができないうことなのです。すると、涅槃と極楽往生とはどう違うのでしょうか。この世で、涅槃の境地を感得し、微動だに揺るがない強い心を持たれる覚者は、転迷開悟は終わったとし

ても、信仰の世界の心を持ち得るゆとりとでも言おうか、チャンスはどこにあるのでしょうか。理論的に把握する思考には、信仰の入るすきはなく、死の悲しみを考えるとき、自分の死の悲しみはありえないことで、他人の悲しみを癒す説明がつかないことになるわけです。この悲しみ痛みが、今最も要求されている心の問題ではないでしょうか。

自灯明、法灯明のうらに、「心を師とせず、心の師となり、心の師とは念仏これなり」と思い取ることが大事だと教えていただいたのは、私の尊敬する大正大学の教授でした。

よく東洋の学問は学ぶではなく、学ねぶであると言われますが、まさにそこがましいが釈迦に学ねぶ、法然に学ねぶ、いわゆるまねて行く、少しでも近付いて行く姿こそ問われなければならないと思います。釈尊の涅槃のお姿を拝見していると、頭北面西、死華など型の上で今日に受継がれている葬儀の墓本的形態が知られると同時に、嘆き悲しみ震えている涙を忘れてはなりません。その心にこそ西方願生の信仰が存在し、救われる思いがするのには私だけでありましょうか。

赤く実を結んだりんごをいただきたいのであって、決して実を結ばなかった理由を聞きたいのではないはずです。どんな小さな、虫食った青いりんごでも、私はこれしか出来なかったが、どうぞ精一杯実のらせたものですから、味わって下さいという自分のほんとうの姿をさらけだし、そのまま救いとしていただくだけです。

往々にして、やれあの時、水が足りなかったとか、肥料が少なかったとか、太陽の光が

当たらなかったとか、その実を熟さなかった原因ばかりを言いたくなるのが人間であります。今更、遠い影響をぐちってもはじまりません。自業自得と諦めて自らやるしかないことと分っていてもなかなか出来るものではありませんが、何故かこの二月十五日近くなると、自分の反省に促されてななりません。

私が所属する仏教情報センターの中に、「仏教テレフォン相談」があります。各宗の比較的若い僧侶で構成され、各宗当番で相談に当たっています。よく年中行事について尋ねられることがあります。その中でドキッとすることは、昔は〇〇という行事をしていたが最近しなくなってしまったのは何故ですかという質問である。

新しい教化、メディアにのった教化、文章伝道いずれも重要なことであることにはかわりはないが、一般の人々には、仏教行事に対し想像以上の反応、郷愁がまだまだ残っていることを改めて感じさせられます。情操教育の大切さを如実に示すものと言えましょう。

〃どこのお寺でもしなければならぬことなのですが、色々と事情がございましてね〃と受話器を持って頭を下げるばかりです。それだけでは相手の質問に答えたことになりませんので、そこは情報を広くバンクしている所ですから、全国各地の寺院年中行事を紹介し参拝を勧めることにしています。

涅槃会には「遺教経」を誦することになっていますが、この経典は釈尊最後の説法と

言われ、八つの教えが説かれています。

少欲、知足、遠離、精進、不妄念、禪定、知恵、不戲論であり、ここでは一々の解釈は省くことにしますが、初めの少欲、知足こそ経済大国の我が国に今最も望まれる心構えではないでしょうか。無着成恭先生の掌話集に、次のようにあります。

人間は生きていく上で、必要以上に魚を釣ったり、獲物をとってはいけなないのだ。ライオンがなぜ、百獣の王といわれるか。それは、一頭のシマ馬を殺せば、その肉がなくなつてギリギリ飢えるまでつぎの一頭を殺さないからだ。太りすぎのライオンというものがいないからだ。ライオンは「知足」を知っているからだ。動物園のライオンはライオンではない……。

六波羅蜜もそうですが、布施、持戒、とこの二つは行為、実行を勧めるものであり、仏教入門と言うべきでしょう。

今から何年前のことになりますか、新宿にある某私立大学の入試問題に「ねはん」の書取りが出題されたことがあります。受験生の皆さん、一点を争うのですからどうぞご用心下さい。

外には、雪がちららと降っている。庭の梢に積もった雪は時ならぬ白く咲きだした沙羅双樹のようなひとしお寂しさをそそります。釈尊の涅槃会に当たり、その「遺教経」を深く心にとどめ、自分を振り返る時にふさわしい冬の一日としたいものです。

(話)

ね は ん え

(童)

— お釈迦さまからの衛星放送 —

(教)

(仏)

ぬの
むら
てつ
や
布 村 哲 哉

「あああ やっと終った。」

学期末の最後の試験がすんだ中学生の
昇一は コタツに入りながら大きく背伸
びをしました。

「今夜はゆっくりテレビを見るぞ。」

昇一の家でも最近 衛星放送を受信す
る装置をお父さんが買ってくれたのです。

世界の放送を見たり聞いたりできます。

皆んなが寝てしまって静かになった家
の中で コタツの部屋だけは にぎやか
な外国語の歌がとびかっています。歌手
の動きに合わせて身体でリズムをとって
いる昇一は夢中です。

ピーポロ ピーポロ ヒューン

おや／ 突然 聞きなれない音がした
かとおもうとテレビの画面がゆれました。
それまで色あざやかに写っていた歌手
の顔が二つにも三つにも見えるのです。
「おかしいな。アンテナの向きでも悪い
のか。それとも機械の故障かな。新しく
付けたばかりなのに。」

あっちこっちのチャンネルを押してみ
ますが どこも同じように――

ピーポロ ピーポロ ヒューンです。
「残念だな。せっかくの衛星放送でいい
気分になっていたのになあ。宇宙衛星の
具合がおかしくなったのだろうか。それ
なら放送局が何か云ってくれてもいいは
ず。」

昇一は ぶつぶつ云いながら まだチ
ャンネルを押しつづけています。

と―― おやおや／
ピーポロ ピーポロ ヒュールルル
ルという音にまざって遠くの方から小さ
い声が聞こえたようです。でも雑音かも
しれません。

同時に 画面が左右に大きくゆれたか
とおもうと やがて白と黒の線だけにな
り音も消えてしまいました。

「もしかすると 地球のどこかの国が強
い電波を出して邪魔をしているんじゃない
か。あるいは地球以外の星からの放送
かな。」

昇一は チャンネルを手のひらで 全
部いっしょに押したのです。

ピーポロ ピーポロという音とともに
やっぱりとぎれとぎれの声が入って
きます。

ポリニウムをいっぱい上げてみました。

「コーチラ コーチラ オシャーカサーマ
マ ホーソーキヨク オシャーカサーマ
ホーソーキヨク。」

「えええ、お釈迦さまの放送局だって。そんな衛星放送なんて聞いたことないよ。だれかのいたずらじゃないの。」
おどろきのあまりコタツから飛び出した昇一ですが、テレビの画面には、明るくてきれいなカラーの絵が写っているではありませんか。

よく見ると、林の中の二本の木の間に誰か横になっています。そのまわりでは大勢の人たちと沢山の動物たちが泣いているのです。

「どこかで見たことのある絵だな。どこ

だったっけ。そうそうお寺でだ。お正月に家族そろってお墓参りに行ったときに本堂で見たんだ。」

おしょうさんが絵の前で説明してくれたのです。

「お釈迦さまが亡くなられたときの様子を描いた『ねはん図』というんだよ。二月十五日が『ねはんの日』で、ねはん会という法要があるんだ。おいでよ。」

でも、昇一はぜんぜん無関心でした。

「だって絵の中にいる人や動物はお釈迦さまが亡くなって、とても悲しかったかもしれないけれど、それから二千五百年以上もたっている今の僕と、どういう関係があるんだろう。ぼくなんか、ちっとも悲しくないや。」とその時は心の中でつぶやいていた昇一ですが、いまテレビに

出ている　ねはん図を見て

「あれーえ／＼」

大空に向かい　しきりに鳴いている一羽のニワトリのそばに立って　泣いているのは　昇一と隣の家の竜ちゃんではありませんか。

「どうして　あんなところに僕と竜ちゃんが？」

ホーロー　ホーロー　ホーロン。

音楽がかわると　画面も移って　隣の竜ちゃんの家があらわれました。

竜ちゃんが　垣根の向こうから呼んでいます。

「昇ちゃん　これ　ぼくんちのニワトリが生んだ卵だよ。とっても新しいから食べて。」

昇一の手の上に　一個の卵がのっかり

ました。

まだ　なまあたたかさの残る卵です。あたたかいぬくもりが　手の中にひろがります。

ところが昇一は　そのぬくもりを払いのけるように手を振ったのです。

卵は地におちて　黄味がタンポポの花のように土にひろがりました。

「昇ちゃん　一体どうしたの。」

竜ちゃんがおどろいた顔をしてたずねます。そんな相手の言葉も　うわの空で昇一が口走ったのです。

「君の家のニワトリが　とてもうるさいんだ。毎朝　早くから鳴くんで寝てられないんだ。」

あ然としている竜ちゃんを残して　家の中へ飛び込む昇一でした。自分でも

何でそんなことを云ったのか わかりません。

ヒューロロ ピューロロ ホーロロロ。

こんどは 竜ちゃんの家の庭です。

竜ちゃんが一人 庭のすみに立ちつくしています。足もとには おまんじゅうのような土が盛られ その前には 小さな花が牛乳ビンにさしてあります。

そういえば その日の朝にかぎってニワトリの鳴き声がしなかったのです。

昇一には ニワトリがどうなったのか がすぐわかりました。

「あのときは悪いことをしてしまったな。」

竜ちゃんの前にある牛乳ビンの小さな花が割れた卵の黄味のように見えたのです。二度三度 耳もとでコワトリの鳴き

声がしました。

昇一を呼んでいるにちがいありません。

急いで竜ちゃんのところへかけ寄ると だまって頭を下げました。

竜ちゃんもニワトリも 許してくれるのでしょうか。

しばらくは だまったままの二人でしたが やがて竜ちゃんが手に持っていた卵を昇一の手へ渡したのです。

これも あたたかい卵でした。生みたての卵だったのでしょうか。それとも竜ちゃんの手のぬくもりだったのでしょうか。そのあたたかさが 今にも泣き出しそうな昇一をやさしくつつんでくれるようです。

「許してくれる？」

昇一が たずねると

「もちろん。」

と卵の中から声がしました。

昇一は ほんとしておもわず

「ああ よかった。」

「昇ちゃん いま何か云った？」

竜ちゃんに尋ねられた昇一は 卵をそつとなでながら いいました。

「ううん ちょっと ひとりごとをね。」

そうだったのです。

お釈迦さまが 亡くなられたときに鳴いていたニワトリは お釈迦さまのことを忘れないようにと あれからずっと毎日 鳴きつづけていたのです。そして 今日も鳴いているのです。これからも また鳴きつづけるでしょう。

あの卵のような あたたかいお釈迦さまのま心。

だれをも許すことのできるお釈迦さまの大きな心。

すべての生きものに泣いてもらえるお釈迦さまのやさしい心を伝えるために。

コケコッコー。

コチラ オシヤカサマノ衛星放送デシタ。

「ほらほら コタツでなんか居眠りをしては風邪をひきますよ。ちゃんと布団でお休みなさい。」

昇一には そのお母さんの声が お釈迦さまのやさしい声のように聞こえました。

(おわり)

◎維持会員へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。『浄土』誌はいよいよ五十四巻に入り、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく思っています。しかし、弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進をお誓いいたすところです。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、ここに心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

ずいそう

頑健と長命とは別物

人は誰でもこの世に生きる限り、長生きを希わぬ者はないであろう。長生きするためには、健康であることが第一であるから、いろいろと工夫して、健康保持に努めている人が多い。身近かに見る一番ポピュラーな例は、いろんな強壯剤とか健康食品といったものを、

こんどう よし、さだ
近藤 良 貞
（鶴高岳製作所相談役）

次から次へと求めて、飲んだり食ったりしている人である。或いはまた、ジョギング等々の運動や、体操に精を出している人である。それはそれでまことに結構なことであるが、それでは、そのような人はすべて長生きをし、そんなことは何もしない人は、みんな短命に

終るかとなると、それは必ずしもそうではないようである。

私は生来蒲柳の質で、子供の頃から老境に入るまで、随分といろんな大病を患った。

小学生の時にガマ腫という奇病にとりつかれて、顎下腺切除の全身麻酔手術を受けたのを皮切りに、全身麻酔や局部麻酔の手術を受けたことが何度あった知れない。最後の大手術は、五十八歳のときのタン石切除の全身麻酔手術であった。それにまた、やれ極度の貧血だ、やれ肺結核だ、やれ肋膜炎だといって入院させられたことも数え切れぬほどある。

そのような有様であるから、若い頃からスポーツというものには凡そ縁がない。ラケットを握ったこともなければ、キャッチボールをしたこともない三十年くらい前に、或る人から、熱心にゴルフを勧められるままに、その人に従いて球打ちの練習に行ったことがあ

るが、一、二回やってみて、これは自分の体には無理な運動であると悟って、あっさりやめた。強いて運動といえ、出勤の途中で車を降りて、三十分ばかり歩いて会社へ行くくらいのものである。これは数十年来続いている。

そんな私が去年の暮、八十五歳満期の養老保険金を受け取った。

満五十歳になった昭和二十七年の春のことである。日本で一、二を争う大きな生命保険会社のベテラン勧誘員に口説き落されて、八十五歳（三十五年）満期の養老保険に入った。勧誘員の申出金額は三百万円であったが、もともといやいやながら入るのであるから、二百万円に値切って、あとは又の機会に、と軽く逃げた。

その翌年の二十八年二月に咯血して倒れ、一年近くの療養生活を送った。

越えて二十九年の春先であった。さきの勧誘員が訪ねて来て、「二年前に三百万円の保険をお願いしたとき、あなたは、今回は二百万円にしておこう、あとは来年にでもするか、と仰っしゃいました。ついては今回その残りの百万円をお願いしたい」と言った。しつこい奴だといささかんにさわったが、食言したと言われては自負心が許さない。「そうか、仕方がないなあ、負けたよ」と、あっさり彼の申出を受け容れた。実は、こう簡単に承諾したのは一つの魂胆があったのである。

もともと私は進んで生命保険に入る気持ちはない。前回は周囲の事情と勧誘員の口説きに押されて、しぶしぶ入ったのであるが、今回は、去年の咯血の事を話せば、向うから逃げて行くであろうと読んだのである。

私は勧誘員に言った。

「宜しい、君の言う通りに百万円入ることに

しよう。前回同様三十五年満期でね。

しかしこの際念のために言っておくが、実は僕は去年の春咯血して、一年ばかり療養生活を送った。それにまた一昨年の秋にリューマチを患って、この通り両手の指が不自由になっっているんだ。お医者によく言って、厳重な診査をさせた方がいいよ」

勧誘員はげんな顔をして聞いていたが、流石はその道ナン十年の練達の士である。ハイ左様でございますか、それでは、と、簡単に引き下りはしない。私をその会社の診療所へ連れて行って、入念に診査させた。

それから一週間ぐらい経ったころ、彼がまたやって来た。よもやOKとはならないであろうと思っていたのに、案に相違して彼は意外なことを言い出した。

「百万円の契約をさせて戴きます。但し年限は、三十五年満期と仰っしゃったが、これは

二十五年ということにさせて戴きたい。

昨年咯血したと仰っしゃいましたが、医者が申しますには、いまはいい薬ができていますので、結核は問題にすることは無い。しかしリユーマチはちょっと困る。あれは心臓に深いかわりがあるのだから、三十五年は駄目。二十五年ならよいであろうと申しました」

私が三十五年と言ったのは、毎年支払う保険料が少しでも軽くなるのを狙っただけのこととて、これから先二十年も三十年も生きられようとは夢にも思っていなかったのであるから、それが二十五年に引き下げられたところで問題ではない。彼の申し出通り契約することを承諾した。

しかしここで一つの疑問が生じた。

昨年咯血して倒れたときは、とてもあと十年とは持つまい、六十まで生きられたら御の字だなと観念していたのに、保険会社が二十

五年は生きられると見込みをつけたことである。生命保険というものは、相手の人の寿命の長短が契約の基本条件であると思う。三十年満期の契約をした人が、次々と十年足らずで死んだのでは、会社の経営は成り立たぬ筈である。私の場合、本人はあと十年とは生きられまいと覚悟していたのに、保険会社は、その倍以上の、二十五年は生き得るものと認定した。驚く外はない。これで見ると保険料というものは余っぽど高いものと思わざるを得ない。

私の高校時代のクラスメートに、安田生命に勤めている者が居たので、あるとき彼にこの疑問を質してみた。すると彼は事もなげに解明して見せた。彼の曰く――。

「保険会社としては、君のようなのが一番いいカモなのだ。生命保険というものは、その人のその時の健康状態にかけるのではなくて、

この人は、これかちさき何年生きる可能性ありやということにかけるのだ。その点からいうと、君のように一見ひ弱そうに見えても、平素用心して決して無理をしない人間は、なかなか死ぬるものではない。それに引き換え、現在如何に頑健でも、その頑健の自信に任せて無理をする人は、案外ころりと死ぬる率が高い。これは長い間の調査と統計でよく解っているのだ。だから保険会社が一番敬遠するのは、プロのスポーツ選手や過激な肉体労働者なのだ。」

そう言われてみると、私の友人の中にも、私などその足許にも寄れないような柔道数段の猛者や、ゴルフ気狂いの元氣者が、次々と私より先にあの世に旅立っている。これで見ると、彼の言う通り、頑健であることと長命であることは、全く別問題であるもののようにある。

五月書房選書

大正大学学長・文学博士
全日本煎茶道連盟理事
装道きもの学院非常勤講師

安居香山 著

正坐の文化

◆煎茶道の文化とその思想◆

■内容

- 一章 正坐の文化
- 二章 煎茶道の歴史と思想
- 三章 煎茶翁に学ぶ
- 四章 茶道小論
- 五章 茶と旅
- 六章 茶事漫筆

■体裁

四六判／上製／口絵二頁

定価一、六〇〇円（二十五〇円）

五月 書店

〒101 東京都千代田区猿樂町二一六―五
電話 〇三―二三三―四一六一
振替 東京九―三三九―四三
取引銀行 三菱銀行神保町支店
当座番号九〇―一四六三

東西宗教の交差点^{〔1〕}

功徳の水

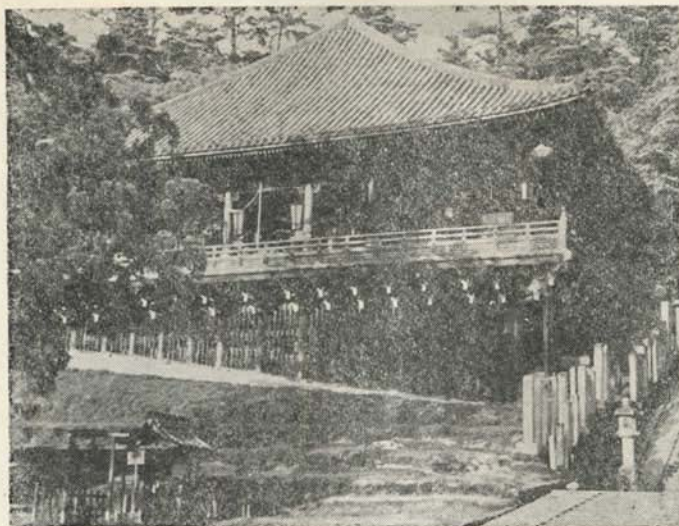
水と言をば、清く澄んだ水、清浄な水を誰しも思い浮かべるだろう。そして、この水こそ私たちの日常生活に、というより生きとし生けるものの生命に、絶対欠かせないものである。

そのためにこの尊い水は、古くから宗教とも深くかかわってきた。人の身心を清浄にするための禊や、行としての水垢離は今でも当然のことだが、旱天に慈雨を乞う祈念も盛ん

に行われていたのである。

ちなみに浄土宗の坊さまがたが、御忌やお十夜の法要儀式の際の正装に用いられる水冠がある。これには、昔中国の廬山で慧遠法師がこれをかぶって雨請いをされたという故事があり、またこの冠を正面から見ると、折り目と縫い目が水字を形づくっているように見えるので、水冠と呼ばれていると聞いている。さらに大事なことは、この浄水は神仏への

福嶋瑞江



——お水取りで有名な東大寺二月堂——

供物として何よりも尊ばれてきた。神道では、米・塩・水を供物の第一に挙げている。また、これを儀式として大々的に行なうものに、奈良の東大寺・二月堂での「お水取り」がよく知られている。

さて「お水取り」とは、陰暦二月一日から十四日まで行われるために、俗に修二会と呼ばれた行法で、二月はインドの正月に当たることから、これを祝って行われたという。この行法は、正式には十一面悔過法と称せられ、天平勝宝四年（七五二年）以来、今日まで一年たりとも怠ることなく修されてきた。本来は国家と国民一人ひとりの犯した罪過を懺悔するための荒行である。

現在は三月一日から十四日まで行われているが、実際にその準備期間ともいえる別火が始めるのは、二月二十日からである。この日から練行の僧衆は、参籠を始められる。そし

て三月一日からの本行に入られるのだ。芭蕉の、

水取りやこごりの僧の沓の音

はこのときの様子を吟じた有名な句だが、こごり（凍り）の僧を、こもり（籠り）の僧とする異論があるのも、うべなえるところだ。

今日では、この行法の棹尾を飾る「お水取り」とこれを導く大松明の炎が、テレビの画面を赤く染め、その庄観はまるで火の祭典でもあるかのような印象を与えて、この国に春を告げる年中行事の一つとなった。しかし、もともと、この三月十三日の未明に行われる「お水取り」とは、二月堂の前の若狹井と呼ばれる關伽井屋で、ご本尊十一面觀音に供える香水を、秘法によって汲む行事である。

ところで、この行事の源を辿ると、そもそも修二会を始められた実忠和尚が、行法中に日本全国から一万三千余の神々や菩薩を勧請

されたのだが、そのときただ一人遅れてこられたお方があった。それが川で魚を釣っていた福井県若狹の遠敷明神で、遅刻のお詫びにここへ香水を湧かせたのだという。

また一説には、この湧き水は若狹の遠敷川と地下水で結ばれていて、そのために、その水路の上に美しい十一面觀音のお像が祀られるようになり、それが所謂今日の「觀音道」なのだとされている。

さてこの關伽井の關伽とは、梵語すなわちサンスクリットのアルギアとかアルガ(ārga, va, argha)の漢語表記である。もとは供養、功德の意味であったものが、語意の変遷をたどって、供物の器からその中の水を表わす語となったもので、功德水、あるいは浄水・聖水の意に用いられている。

わが国でも、アッカからアカとして、とくにアカは女性語として定着したようだ。源氏

物語の「若紫」の巻にも、この言葉が見えて
いる。源氏が北山に転地療養に出向いた折の
こと、深山の古寺で加持祈禱を受けながら、
見下す坊の一つに、祖母の手でひっそりと養
育されている、まだあどけない若紫を見染め
る一節に清げなる童など数多出で来て、闕伽
を奉り、

花折りなどするも露に見ゆ。

とある。そして、今日私たちが墓参する際に、
水を汲んで墓所に持ちはこぶアカ桶も、この
闕伽にはかならない。

ところで、最近私たちがよく耳にするアク
アラング(潜水具)や寶石のアクアマリン(海の
水色だから)のアクアはラテン語のaqua(水の
片仮名表記である。果たしてサンスクリット
のアルガが西へ行ってアクアとなり、東に來
てアカとなったのか経緯は詳かではないが、
何かの繋りがあるのは確かであろう。

しかし、宗教的な面で、水で浄めるとか、
あるいは尊い水の功德にあずかるのは、洋の
東西を問わず共通しているのは事実だ。

例えば、日本では神社仏閣へ一歩足を入れ
れば、すぐさま手洗場が目にとまる。五十鈴
川のような清々しい流れをこれに代えるところ
すらある。参詣する前に、人は手を清め、
そして心も浄めるのだ。同様にカトリックの
教会や聖堂でも、入口の扉近くにかならず聖
水盤が設え^{しつ}られている。信者は人指し指と中
指とそれに軽く浸してまず額にあて、それで
静かに十字を切って中へ進むのだ。フランス
にはやたらに教会通いをする見せかけて信心
家を「聖水盤の蛙」という悪口もあるほどだ。
冗談はさておき、浄水の功德への信仰は、
カトリックの世界では非常に強いものがある。
なかでも世界的に有名なのは、ルルドの泉で
あろう。

フランス南西部のピレネー山脈に近いこの
ルルドには、町の外れを流れるガブ川の岸辺
に昔から幾つかの洞窟があった。そのうちの
一つマッサビエルの洞窟に聖母マリアが出現
したのだ。一八五八年二月のことである。こ
の出現にあずかった少女ベルナデットには、



——ルルドの大聖堂（フランス）——

聖母の貴婦人のように見えたという。出現は
何回かあって、七回目はその洞窟の傍らに小
さな泉が湧き出で、眼を患っていた男がその
水で洗うと、たちどころに治ってしまった。
またそこに聖堂を建てるようにとの聖母の声
も聞こえたという。そのお告げのとおり今日
では立派な聖堂が建てられている。

そして、それからというもの、この泉の水
は信仰の篤い人びとの病をつぎつぎ癒し、そ
の数は計り知れないと言われている。やや白
濁した水は、管でひかれて水道のように蛇口
から汲みとることができ、人びとはこの浄水
を持ち帰ることも許される。また風呂の設備
もあって、病人は身体を浸すことができる。

この洞窟の傍らには、足の悪い人たちが、
ここでたちどころに治癒して、帰るときには
不用になった松葉杖が沢山奉納されているそ
うだ。しかし、こういう霊験あらたかとも

言おうか、奇跡として信じられている事柄には疑問を抱く人も多い。聞くところによると、若いスペイン人の医学生が、この地を訪ねて、大いに笑ってやるつもりだった。だが、実際に今まで立てなかつた病人が、目の前で立つて歩くのを見て、翻然として神父になったという。また一九一二年にノーベル賞を受けたアレキシス・カレルには、名著『人間この未知なるもの』とともに『ルルドへの旅』という著作のあることを紹介しておこう。

残念ながら私にはその讃否を云々する資格はない。ただ言えるのは、どんなに有難い水であっても、受ける側に信仰がなければ、その功德にはあずかれない、それは薄く濁った白い水に過ぎないのだ。それよりも、キリスト教の信仰の礎を築いた使徒の一人聖パウロ殉教の地を訪れたときの感慨は、まことに無量であった。

そこは、ローマ市の聖パウロの門を出て南へオスチア街道を進み、やがて東へ分かれたラウレンティア街道沿いのローマ郊外にある。殉教は西歴六四年、ネロによる初期キリスト教徒大迫害のときと推定されているが、つねにパウロと行動をともしていたルカの書き記した使徒行録にも、確実な史料は残されていない。

ローマで捕われの身となつたパウロは、ローマの市民権をもつていたために、キリストやペテロが処刑にされたのとは違って、斬首の刑にされた。当時、処刑はかならずローマ郊外で執行されることになっていたのだ、パウロも、今も面影の残るこの街道をひかれていったのだ。

刑場になつた場所は、葦の生い茂るじめじめした湿地で、滅多にも足を踏み入れないような空地であつたらしい。ここには清冽な泉

が湧いていたので、アクア・サルヴェ（よき水）と呼ばれていた。

ここで、まず鞭打ちが行われたあと、その無惨な裂傷にいたんだパウロの身体は杭に縛りつけられた。いよいよ首が刎ねられる。するとその首は、ぼんぼん、ぼんと三つ跳びはねて、地に転がったという。そして、その跳びはねた首が地についた三つの場所から、新たに泉が吹き上げたのだ。

現在はここには「トレ・フォンターネ（三つの泉）教会」が建てられ、トラビストの修道士たちに守られている門から聖堂までの前庭に植えられた丈高いユーカリの樹は、パウロの縛られた杭の象徴だろうか。まことに静かな、しかし言いようもないもの悲しさの漂う雰囲気であった。こういうような、所謂「聖地」は、今世界中どこも観光化されがちだが、朝早かったせいもあってか、およそ人影も見

えなかった。

ただ私は、ここで不思議な実在感を味わった。言葉では云いつくせない何か、強いて表現すれば自己を確め、見つめ直すといった、精神的な刺激を受けとめたように思った。そして聖堂を辞し、門の方へ戻ろうとしたとき、ユーカリの樹の下の水呑み場のよう^{しづ}に設えられた水道の蛇口から、銅製の水差しに水を注ぎ入れている修道士の姿を目にした。さらにもう一人近くの住人らしい背を丸くかがめた老婆が、すでに水差しを手にして、門の方へ向かっていた。

そうだ、浄水なのだ。きっと功德があるに違いない。私は、全く素直に、そう直感した。そして、この水が多くの人びとの喉をうるおし、心の糧になっていることを疑わなかった。

（つづく）

四

行

詩

梅
の
花

寒い朝
昇る陽にほほえみ返し
ニコニコ　クスクス
紅梅　白梅
暖かい

清^{きよ}

川^{かわ}

宗^{そう}

治^じ

(詩

人



木

下

隆

一

随

筆

集

11

海と山の狭間で

—唱歌と童謡(1)—

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

いま童謡がブームなのだそうだ。童謡のコンサートを開けば、どの会場も満員の盛況だというし、レコードもクラシックの歌手から大人のコーラスグループ、演歌の歌手に至るまで、出せばそれなりの売行きを示すと聞いている。ただこの童謡とされている歌の中には、多分に唱歌が含まれているのである。童謡と唱歌は本来別の物であるはずなのに、現在ではその境界線は曖昧になってしまっていて、私自身の概念も亦その域を出ない。ふとそのことが気になって、図書館へ行って調べてみたが、参考文献は意外に少なかった。田舎の図書館だから少ないというのではなく、このジャンルの研究はされているようでない

て、案外されていないのである。

私が図書館で得たのは、「日本唱歌集」（堀内敬三・井上武士編―岩波文庫）「日本童謡集」（与田準一編―岩波文庫）「赤い鳥傑作集」（坪田譲治編―新潮文庫）「童謡・唱歌の世界」（金田一春彦著―主婦の友社）、「童謡でてこい」（坂田寛夫著―河出書房新社）の五冊にすぎない。金田一氏と坂田氏の物以外は昭和三十年代前期の出版で、資料にするにはいささか古く、戦後の童謡について触れられているのは、坂田氏の「童謡でてこい」だけである。これは氏が大阪の民放ラジオ局で、新しい童謡づくりに携わっていた当時の体験から、いかにして戦後の童謡が生まれてきたかという必然性を記し、かつ新しい童謡の出現を望む、という体の著作で領ける節も多々あったが、残念ながら今後の童謡はかくあるべきという、確固たる信念はうかがえなかった。もともと歌は世につれと言うから、求めようとする方が無理なのかもしれないが……。まあそれはともかくとして、童謡を考える場合、我々が小学校（昭和16・22、国民学校初等科）で習った、いわゆる小学唱歌を抜きにしては考えられない。

唱歌という言葉は、明治五年（一八七三）八月の学制頒布以来用いられているもので、「楽器に合わせて正しく歌い、徳性の涵養情操の陶冶を目的とする教科目と」、「その教科において用いられる歌曲」の双方の意味を持っている教科目の方は昭和十六年（一九四一）に小学校が国民学校と改称されたのに伴って「音楽科」と改められたが、教育用の歌曲を「唱歌」と呼ぶことはいまも続いている。教科目の方の「唱歌」は英語の *Singing* を、また歌曲としての「唱歌」は *Song* を和訳したものであろうが、日本では専ら小・中・高校や幼稚園

で教育用に使われる歌曲だけを指して、形式の上では全く唱歌と同一の「国歌」「校歌」「応援歌」「童謡」「民謡」などは、学校で教える限り「唱歌」と考えられている、と「日本唱歌集」の解説で堀内・井上の両氏は述べているが、この伝でゆけば、先日テレビで紹介された東京のある中学校で、日本的音階と唱法を学習するための教材として、森進一の「おふくろさん」が使われていたが、演歌も学校で使われれば「唱歌」の範疇に入るのであろうか。何にしてもクラス全員が森進一ばりの声と節廻しで、へおふくろさんヨ、おふくろさん……とやっていたのは一種異様な光景であった。余談はさておき、両氏の解説では、洋楽を全く知らなかった日本国民に、洋楽のリズムや音階を知らしめ普及に力あったのは、「唱歌」を生み出した明治教育の功績である、と結んでいるが、その最大の功労者は伊沢修二（一八五一—一九一七）であった。

伊沢修二は二十四歳の若さで愛知県師範学校の校長となるや、校内に幼稚園のような施設を作り、子供に唱歌や遊戯を教えた。この新しい教育方法に注目した文部省は、伊沢にアメリカ留学を命じ、音楽教育の実情を見聞させ、明治十二年帰国すると、直ちに文部省音楽取調掛（後の東京音楽学校）の御用掛に登用した。これによって「唱歌」は明治五年の学制頒布以来、八年目にしてようやく日の目を見ることになったのである。教科として「唱歌」を定めたものの、何をどう教えたらいいか全く見当がつかず、教師もいなかったで、実際には有名無実で、学制の中でも「唱歌」の下には（ふん当分^{ふん}之を欠く）と記して、棄て置かれていたのである。

伊沢修二に文部省が注目するきっかけとなったのは、「蝶々」の歌であった。子供に歌わせる歌を探していた伊沢は、ふとしたことでスペイン民謡の旋律を得て（アメリカの歌集から採ったと推察されている）、部下の野村秋足に命じて名古屋地方のわらべ唄を集めさせ、その中から一番旋律に合いそうなものを一部改作させて出来たのが、

てふてふ てふてふ

菜の葉にとまれ

なのはにあいたら 桜にとまれ

さくらの花の さかゆる御代に

とまれよ あそべ あそべよ とまれ

の詞であった。明治七年のことであったという。従って「唱歌」は「蝶々」を以て嚆矢とす、と言っても過言ではないと思う。この歌は戦後「さかゆる御代に」の個所が「花から花へ」と改められて現在に至っている。

またまた余談になるが、ここではわざとち・ようち・ようを、昔私が習い覚えた通り文語体でてふてふと書いた。なぜ、てふてふがちようちようなのか、なぜ、それをチヨオーチヨと歌うのか、子供ごろにもこれは大疑問であった。いまでもこの疑念は拭ききれない。チヨウと発音する語には、文語体では次に挙げる異なった四種類の表記法がある。

1 チャウと書く物

丁、庁、町、打、頂、長、脹、張、漲、帳、帖、暢、腸、停、聴、挺、槌、など

2 チョウと書く物

徴、懲、重、澄、竈、など

3 テウと書く物

兆、銚、跳、眺、挑、朝、潮、嘲、調、涸、彫、趙、超、迢、貂、鳥、釣、肇、弔、手、掉、など

4 テフと書く物

蝶、牒、牒、喋、貼、など。

テフの系列にはまだ多くの語があつて、喋や牒の文字も見えるが、喋は浚喋のモツの発音の方が馴染深いし、牒その他のものは日本的ではないので除外しても差し支えないだろう。それはそれとして、改めて日本語の難しさにウーンと唸ってしまった。子供の頃には自然に頭に入っていたものが、何十年も現代仮名遣いと読み方に慣らされてしまったいまでは、記憶はかなりあやふやになっている。文語体でルビをと言われても、恐らく半分も出来ないのではないだろうか。蝶々は疑問のまますつと脳裏にあつたから分かるにしても、啼鳥にテイテフ、釣竿にテウカン、超特急にテフトッキフと間違えないで振る自信はない。

国民学校四年生の正月、叔母たちが百人一首を取っていた時、壬生忠見の「恋すてふ我が名はまだき立ちにけり人知れずこそ思ひそめしか」という歌があるのを知って、恋すてふのテフと蝶のテフは関係があるのでは、と自分では重大な発見をしたつもりで「辞林」を引張り出してはみたものの、引き方が分からない。試行錯誤の末やっと見出したのは、

「てふ^つ助詞『といふ』の約言。『夢—ものを、頼みそめてき』』という一行余りの説明だった。二つのテフには全く関連は無く失望したが、大人の辞書を初めて自分の意志で活用したのだから、私にとつては記念すべきことであつた。ついでと言つてはなんだが、「まだき」という語を引いて、和歌の意味を大体把握してしまったのだから、思えば私はませたガキだつたのである。おかげで猿丸大夫の「奥山に紅葉踏み分け……」に次いで、小倉百人一首では二つ目に覚えた歌となつた。なお、例文として引かれている「夢てふものを頼みそめてき」は、古今和歌集恋の部（新潮日本古典集成）にある小野小町の「うたたねに恋しき人を見てしより夢てふものは、頼みそめてき」の下の句であるが、広辞苑では「夢てふものは、」を採っている。出典の違いかあるいは明治時代には、「夢てふものを」とした古今集が広く流布されていたのかもしれない。

あの時使つた「辞林」はいまでも私の手許にある。あの戦火をどう潜り抜けて来たのか、その経緯もいまとなつては定かでないが、母が疎開荷物の中にでも忍ばせておいてくれたのであろう。もう減多に手にはしないか、愛惜の念捨て難く、書棚の隅に古書特有の匂いを放ちながら、ひっそりと納っている。明治四十四年四月八日、三省堂書店が発行した初版本で、奥付には定価貳円五十銭となつてゐる。当時としては高価な物であつたに違いない。大事にしてやろうと思つてゐる。

「てふてふ」にこだわりすぎてあまり筆が進まなかつたが、次号では唱歌と童謡の関連について考えてみたい。

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』二月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、再び格調高い小林治郎先生の作品を頂戴することになりました。小林先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度並びに一昨年度の松浦春子先生の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二―一八七

寢室、厨房手洗いとすべてが用意されている。

「わたしは、かつてこんな美麗な家に住んだことがあります」

「美麗どころか、先日参上した突厥の者が短時に造営したもので、不備だらけでございます。ご不満でしょうが和上、どうか此処にお住まい下さい」

善導はくまなく草庵内を点検しまわったが、何やら口中で偈文のようなものを音誦しはじめた。それも一定のメロディが付けられた偈文であった。

「……時光遷流転、忽至五更初、無常念念至、恒与死王居……」

王徐明は聞き耳をあつめた。

「和上、それは何の偈文でしょうか」

「わたしが作った往生礼讃、後夜無常偈の一節です」

「是非御教示下さい」

襟を正す姿勢になった。

六時礼讃の「後夜」に属する長詩の一節である。後世日本にも伝わって僧俗に愛誦されたものである。和文で書きくだしておこう。

時の光りは遷って流転し

たちまち五更の初めをきざむ

無常は念々のうちに至り

つねに死王と居を共にする

もろもろの行道をすすめて

励んで自由闊達な生（無余）を感得

せよ

この無常観では限りある人生を強調している。うかうかる世事に振りまわされる生きざまを、善導は「死王と居す」と表現した。世のあらゆる悦楽には、その背後が絶対支配権を握る「死」が貼りついている。死の王さま――「死王」と呼んだのである。

「わたしは出家してこのかた、いつも乞食だった。定まった家もなく血族とも断絶してき

た。一步でも二歩でも仏の世界へ近づくためには、こうしなければなりません。いまここで草庵を結んで独居することは何を意味するのでしょうか」

優さしい眼差しで問いかけてくる。だが柔和な視線の底でひとすじつらぬくような発光があった。

「お山の冬はきびしすぎます。和上のお身体に障るのではないかと案じまして……」

「安らかな往生を遂げさせてやりたい、ということですね。好意は嬉しいけれど、それはわたしの本意からひどくかけ離れてしまいます。わたしども浄土の願生者は、坐してみ仏のお迎えを待つものではありません。願生者とは、願って生きるのです。死を願うものではありません」

「それは十々わかつているつもりです」

王徐明は顔を赤らめずにはおれない。つね日頃教えこまれてきた内容だからだ。

「経文に示してあるように病い重く、視力も

薄れ阿弥陀仏のお姿を観ることが出来なくなったら、その御名を高唱せよと説いています。命が尽け果てるまで生きよ、働けということではないでしょうか」

「寒気はきびしくとも悟真寺に独居なさるということは……」

「寒気に耐え忍ぶのが生きる証かしであり働いていることになります」

きっぱりと拒絶されてはそれ以上、強要するわけにもいかなかった。

「ご気分が向いたら山を降りて来られて、お休みになっていって下さい」

「そうです。写経を都へ届けるとき、ひと息入れるには恰好な場所ですね」

善導は黄昏の残光を頼りに神和原のあちらこちらを散策しはじめた。

片隅に、これも木の香も新らしい小屋が建っている。その前で、やっと歩きだしたばかりの幼な児が板片で地べたを叩いている。虫でも見つけたのだろう。

「あの子は？」

「じつは先日、うかがった突厥の者の忘れがたみで」

「あの人は亡くなったのですか」

「どこかで生きてはいるはずですが、亡くなったようなものです」

「というと？」

「天后の命に叛いたため、いっさい姿を現わすことが出来なくなったのです。うっかり現れると、本人はもちろんあの子も、母親も命が危うくなります」

「それが、なぜ妻子をこんな場所へ置いておくのですか」

「泥鬼は、突厥の者の名前ですが、すべてを和上にゆだねて姿をかき消しました」

「わたしにすべてをゆだねて……」

「はい。此処で一緒に暮して、和上のお世話をしていれば、必ず女は立派なお念仏の信者になるでしょう。この子もです」

「この子が、事理をわきまえるまで、わたし

がこの世にいるのとは思えませんが」

「和上はいらっしゃらずとも、その母親が和上の意を体して子供を立派に仏の子として育てあげるでしょう」

「その母親は中にいますか」

善導は小屋に近づいた。一昨日移り住んできたばかりで、一面識しかなかった。失礼があつてはならない、と王徐明はあわてて師を追ひ抜いて小屋へ走りこんだ。

狭い室内の中央に一人の尼僧が坐つていた。頭頂は青々と剃りあげていたが、僧衣をまとつていない。一昨日そのまま絹の単衣であつた。

「柳氏だな」

王徐明はためらいながら声をかけた。一日のふさふさした黒髪が忘れ難かつたからである。別人ではあるまいか。

「はい」

「和上がおみえになった」

柳氏は簡素な吊り棚にまつた念持仏に祈

つていたのであろう。壁に向つて姿勢を扉口のほうへかえ、額を床にすりつけて拝礼した。

「これが母親でございます。四日ほど前に憚良が連れてまいり、わたしは一昨日会ったわけですが、その折は美しい有髪でした」

「自分で剃髪したのですか」

善導は柳氏へじかに訊いた。

「はい。自分でおりました」

「なぜ？」

「此処はお寺と聞いてまいりました。女人が寺で寝起きするからには尼僧でなければいけないのではありませんか」

はきはきと答える。

「そこにまつてある仏は？」

「あの人がくれたものです」

何やら石を削った仏像であった。

「突厥の仏かな」

「多分そうでしょう」

王徐明は棚を覗きこんで、蕃風の異仏であ

る。

「剃髪したままで、あの子を育てるのですか」

善導は立ち去りかけて最後の質問を發した。

「そうしたいと思います」

「あの子も僧にしますか」

「寺で育てば当然、僧になつてもらいたいと思います」

善導はうやうやしくその異仏に拝礼すると、黙したまま戸外へ去つた。神和原を離れてゆく。

八

山麓へさしかかったころ、夜道になっていた。王徐明は手の甲にのせた蠟に灯を入れた。

「和上、お氣が向いたら、さっきの尼を訪

ね、仏の道を説いてやって下さい」

念を押さずにはおれなかった。

「いまそれを思案しているところでです。あの人をどのように導いたらよいかと」

「有難うございます」

「それにしても更生よ。親子の関係とはだいじなものですね」

「……」

「父や母がいなければ、わたしたちはこの世に生まれ出ては来ない。父母の恩は何よりも重い。孝養を尽した者は、その美德だけで往生の素懷を遂げられるでしょう」

「俗縁にしがみつくことは、死王と同居することはならないのですか」

「父母は世間における福田の極頂です。時と場合によっては、仏恩より重くなることがあります。仏恩は、出世間の福田の極だからです」

「そのあたりが、よく理解し兼ねますが……」

「仏が在世した当時、こんな逸話がつたえられています」

インド国内で飢饉におそわれ、食物の入手が困難になった。釈尊を開こむ僧伽集団として例外ではなく、いくら托鉢をやっても全く施物を得ることが出来なかった。釈尊自身も三日間、一粒の糧も口にせず、体力はおとろえ弟子たちとの会話も不可能な状態におちいた。

ある比丘がこの有様を見て嘆き悲しみ、決意した。身にまとうている三衣を売り払うのである。その三衣は寶石がちりばめてあったりした高価なものだった。

ヤミ市へ三衣を持ってゆき、これを一鉢の飯に換えた。比丘はその飯を仏にささげ、どうかこれを食べて体力を回復なされ、再び私どもにお説教を続けて下さい、と懇願したのである。

釈尊は、どのような手段で一鉢の飯を入手したかを問いただしたあと、「比丘の三衣は

これ三世諸仏の幢想。その因縁はきわめて尊く、きわめて重く、かつ大恩がある。この衣を飯にかえて我れに与う。汝の好意を得るも我れはよく消化し能わずと。比丘は驚いて、仏はこれ三界の福田、聖中の極におわす。仏を除いて誰がこの食を受ける価値あるやと。積尊は答えて、汝に父母ありや。父母はよく汝が身を生む。汝において大重恩あり。このゆえを以て食を受くる価値あり」と断言なさったのである。

これは善導が遺した「観無量寿経注疏」の「序分義」に紹介された部分で、この經典が韋提希夫人とその子阿闍世太子とのゆがんだ母子関係をテーマとしているため、ことさらに「父母之重恩」を強調したと解せられなくもないが、一面で善導教学の骨髓を覗き見る照射燈の役割を果たしている。

たしかに王徐明が指摘したように矛盾の論理である。仏へ近づくためには俗縁のしがらみを断絶しなければならない。父母の恩もそ

の俗縁の最たるものであらう。しかもなお、その俗縁父母の恩を仏恩より重し、と善導は主張するのである。父母が極悪人であれば、孝養を尽くすその子も極悪の渦へ巻きこまれてゆきかねない。

「だからこそ、わたしどもは阿弥陀仏のお慈悲を必要とするのですよ」

善導は坂道の中で立ち止まると語気を強くして言った。

「人間は所詮、悟達しきれないとおっしゃるのですね」

「いくら避けようとしても下品下生の境涯へさまよいこんでしまうことがあるのです。そこからの脱出をはかって、さらに深い悪の沼におちこむこともあるのです」

「世間と出世間の福田……その選別はなかなかに難かしいですね」

「父母への重恩はもちろん、世で慣らわしてきた道徳が選別するための基本にはなりません。どんな宗教信仰でも人倫にそむいては成

立ちません。世間法というものです」

「出世間とは？」

「そこを乗り越えた世界です」

「釈尊は王城を捨てて出家しました。母君は世にいなかったが父王は健在でした。孝養にそむいているではありませんか」

「そのとおりです。釈尊と父王との間には父と子との関係のほかに王と皇太子という立場もあったはずで。そして、釈尊には王位に就くことを忌避なさったとも思われます」

「王法の悪徳を骨の芯に泌みてご存知だったからでしょうか」

「善導が仏陀となられて数年もしたころです。父王のいる釈迦族の王城が危機に瀕したことがあります。強国コーリヤ族に攻められたのです」

善導がどの「仏伝」に拠ったかは不明であるが、このコーリヤ族との戦いは内容がまざまざとつたえられている。

すぐ隣国で釈迦族と深い婚姻関係を結んで

きたコーリヤ族だった。釈尊の生母マヤー（麻耶）妃も、またカピラ城へ出家時に遺してきたヤシヨダー妃もコーリヤ族の出身であった。

争いが始まると、老いたる父王（浄飯王）は釈尊に帰郷して指揮をとって欲しいと使者に懇請しせる。だが釈尊は戦争の非を説いてこれに応じない。

それでも釈尊はコーリヤ城へ出かけてゆき、攻撃を中止するように説く。絶対平和主義である。

「仏伝」によってはこの説得が成功し、戦いは中止されたとも、またコーリヤ族がカピラ城へ侵入、大惨劇がくりひろげられたとも書く。

いずれにせよ、善導は世間法と出世間法——現実と理想との接点を、阿弥陀仏の慈悲という信仰で結索しようとする。その結索が甚だ難事であるからこそ「二河白道」なる細いひとすじ道の思想も生まれてきたのであ

る。

「仏陀」を語り終えて再び夜道を歩きだした善導だが、悟真寺のある山壁へ登ろうとはしなかった。いまやってきた道を引き戻りはじめた。

「和上、どちらへ……」

王徐明は追いつきながら訊いた。

「神和原へ帰りましょう」

「えっ、神和原へですって」

「あのお堂に住みつくことにします」

「住んで頂けますか」

「さっきの尼僧、それと幼い男児を見ていると、何としても母子に仏法を継承させなければいけません」

「さっきは引揚げて来られましたが……」

「そうです。出世間の法にこだわったからです。この年齢になって、未だ愚かですねえ。いや、愚かになるまいとすることがいけないのです」

謙虚に反省する。

「あの母子を見たからですか」

「それだけではありません。あの何とか言いましたね、突厥の人。せっかく仏心に目ざめてくれた志を無にしているわけですからね。自分のことばかり考えて、眼を世間へ向けていません。あんな草庵にこもりきってはいません。働きがなくなる、と申しましたが、突厥の人の心情を思えば、あそこで彼の妻子を鍛えてこそ、真の働きというものでしょう」

「和上のおっしゃる働きという言葉の意味が解けてきたように思われます」

兩人はすでに漆黒の闇に包まれた神和原へたどり着いた。王徐明は堂の扉をひらき、師を招き入れた。夜具はおろか調度品一つなかった。

「一兩日に必要なものをそろえましょう」

「いや。何もいりませんよ。こうして坐れば……」

と善導は丸太を組んだ壁を背にして安坐すると、ゆっくりと念仏を口唱しはじめた。

九

神和原における最初の夜が明けた。永年にわたる習性で、善導は身体を横たえないでも熟睡できるようである。太陽が昇っても心地

良げに寝こんでいる師をそっとしておいて王徐明は柳氏母子の小屋へおもむいた。

柳氏はすでに朝餉の仕度にかかっていた。王徐明は善導や自分たちの粥も炊いてもらうように頼んだ。

「和上さまたちが昨夜お堂へお泊りになったことは存じております。だからほれ、皆さまの分も一緒に煮ております」

たちこめる湯気のなかで柳氏は微笑んだ。

後宮の奥で下働きをしてきただけに気づくほどの訓練をつんでいるようだ。

「これからも和上のお世話をしてくれ」

「こうしたこと自体、そのつもりでおります」

と剥りあげた頭頂へ手をやった。

「気力は充分だが、和上の体力はだいぶ弱まれている。滋養のある品を惜しむことなく食膳に添えて欲しい。これは当座の分だ。あとは随時届けるゆえ食費の心配をする必要はない」

王徐明は銀貨の包みを手渡した。

「貴郎は一緒に暮すのではないのですか」

「とんでもない。わしなぞが此処でうろろろしてみよ。たちまち追手が現れるだらう。和上もだが、おぬしの身も危うくなる」

「身をお隠くしになるのですか」

「泥鬼どのと同じで、街のどこかでおぬしたちの安らかな暮しを祈ることにする。ただし、このことは和上に洩らしてならないぞ」

「どうしてですか。黙って立ち去るのですか」

「和上はお優しいお方だ。わしが苦勞をするとか知れば、必ずわしのあとを追っていらっしやる。あれほどのお方を、陋巷の塵にまみれ

させてはならない。それに……」

あとの言葉はのみこんだ。

善導の遷化が遠い日ではないことを確信していたのである。

柳氏も追及はして来なかった。根拠はなくとも漠然とした勘で感得していたのかもしれない。

その日終日、柳氏はお堂で善導手ずからの講義を聴き、礼拝行などの指導を受けた。王徐明も何喰わぬ顔でこれに立ち会った。

夕餉も済み、中夜後夜の礼讃を唱えおわって柳氏は眠りこけてしまった幼な子を抱いて自坊へ引揚げていった。

「和上、おやすみになったら如何ですか」

王徐明は日中、どこから探し求めてきた柔らかな褥を敷きのべた。

「これは暖いものですね」

善導も褥の肌ざわりを手の平でたしかめて眼を細めている。綿と毛を縫い合わせた品だった。

「突厥の者が砂漠で夜を明かす折、これにくるまって眠るのです。和上も今夜は横になれるがよろしいでしょう。お楽になれますよ」

「そうですね。久しぶりで手足を伸ばしてみますか」

善導は上機嫌である。

「是非そうなさいませ」

「それには条件が一つある。吏生よ、貴郎も同じように寝て下さい」

「もちろん、そうさせて頂きますよ」

「果たしてそうかな……貴郎はわたしが寝こんだあと、此処を脱け出すつもりではないですか」

「……」

「隠さないでもよろしい。貴郎は此処におれない立場です」

「和上……」

「此処を出て、どこへゆくつもりですか」

「街へ帰ります」

「それならわたしも蹤いてゆきましょう」

「いけませぬ。そのお身体で」

「吏生よ、こうしませんか。明日、此処をたつて山へゆきなさい。悟身寺に籠もりなさい」

「悟真寺にね」

「あそこなら心静かに修法も出来るし、身の安全も護れるでしょう」

善導は何でも知りつくしている。

「そうさせてもらいましょか」

「吏生よ。街へ出てどこへ潜伏したとして、

貴郎のたどる道は見えるようです」

「どのような道でしょうか」

「王城から来た追手と追いかけてこをするだけです」

「……」

「その結果は相手を殺したり、自分も殺されます」

「そんな運命をたどっても仕方のないわたしなのです」

「人間徐明はたしかにそうでしょう。しかし、わたしという仲立ちを得てひとたび仏の子となった貴郎にそんな生き方は許されません。一日、一時でも生きのびて仏を祈る時間をつみかさねなければいけない」

「……」

「昨日の夜道で、貴郎は生きる働きが何であるかが解ってきた、と言った。その生きる働きとはこのことです」

「わかりました。わたしは悟真寺へ籠もりましょう」

「そうなさい。わたしは此処にいますのであちらの修法場は無になります。朝に晩に山や谷へ響きわたっていたお念仏の声が途切れてしまいました」

「そうですね」

「禽獸や草木が阿弥陀仏のお慈悲に浴する機が失わしています。是非、よみがえらせて下さい」

善導が念仏弘通の対象としたのは人間だけ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

弘

通



ではなかった。禽獸や草木にまで及ぼそうと
していたのであった。

一枚だけの褥を両端から巻きこんで、そこ
へ入れたお互いの身体が背中を触れ合わさん
ばかりにして、二人は眠りへはいった。

眠りに落ちる寸前、王徐明はこの聖者に寄
り添って眠る夜であれば、きつと清らかな夢
に遊べるであらうと信じた。

だが曉方、目ざめた王徐明は首すじにべっ
とりと嫌な汗をかいていた。悪夢にうなされ
ていたのである。

下肢に肥り肉が巻きつき、いっそう重感の
ある白い肉塊で胸もとを圧迫され続けてい
る。顔は見えず声も聞きとれないが、相手が
則天武后であることは歴然だった。

その重圧から脱出すべく、自分は汗みどろ
になって相手を押しのけようとしている。そ
んな悪夢の内容だった。

五官が鮮明によみがえってきた。
何という悪夢をみたものだろう。お前の性

根はまだまだ腐りはてているのだ、と自嘲し
てみたとき、耳先に善導の柔らかな寝息が流
れこんできた。悶えを、一皮つつ剥いでくれ
るような甘美な響きをともなった寝息であっ
た。

いや、寝息ではなかった。それは念仏の間
断ない呟きではないか。

「和上、お目ざめでしたか」
声をかけてみた。

だが返事はなかった。呟きは停まり、ただ
の寝息にかわったのである。

いつか善導自身が語ったことがある。称名
をつみあげてゆくと夢と浄化し、寝息にまで
念仏が唱え続けられると。

王徐明は、昨夜は迷っていた気持がしっか
りと安定するのをおぼえた。

今日からは終南山へゆこう。悟真寺に籠も
って念仏三昧の明け暮れにひたりこむのだ。

(つづく)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六〜九枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十四巻 二月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十三年 一月二十五日 印刷

昭和六十三年 二月 一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

新刊

浄土宗勤行の解説

B6判三六六頁
価三、六〇〇円

日常勤行式、歎仏偈、三尊礼、真身観文、阿弥陀経、一紙小消息、歎仏頌、讀重偈、光明歎徳文、後夜と晨朝礼讃偈、六時礼讃無常偈、發願文、五懺悔、広懺悔、帰三宝偈、三帰礼、祝聖文、広開偈、還相回向偈、自信偈、降魔偈、歎経偈、本誓偈、外に三偈文

法然上人等法語で綴る

念仏の法門

B6判四二四頁
価三、八〇〇円

三部仮名鈔の全訳

念仏の要諦

B6判二九六頁
価二、九〇〇円

全訳 法然上人

勅修御伝

B6判八四七頁
価六、八〇〇円

和訳 浄土

三部経

B6判四七四頁
価二、五〇〇円

和訳 法然上人

選択集

B6判三八七頁
価二、五〇〇円

和訳 善導大師

観経四帖疏

B6判五八四頁
価三、五〇〇円

和訳 善導大師

六時礼讃

B6判二六五頁
価二、四〇〇円

浄土宗 檀信使用のおつとめ

一部価四七〇円

○葉書でお申込下さい。代金(送料実費)は後払(振替用紙同封)○

編と訳 村瀬秀雄

〒256 神奈川県小田原市国府津5-14-49

發行所 常念寺

電話 0465-43-1352

振替 横浜 3-8296番